

第5回
北海道大学映像・現代文化論学会大会
——発表要旨集——

◆研究発表 要旨

『処女ゲバゲバ』から見る大和屋竺とエロダクション運動

崔 文媿

本発表は背景研究として、若松孝二プロダクションに関わる作品『処女ゲバゲバ』（若松孝二監督、大和屋竺脚本、1969年）を分析することで、1960年代後半のピンク映画運動（エロダクション運動とも呼ばれる）における大和屋竺の映画理論の位置づけを明らかにする。

大和屋竺は若松孝二の製作による監督作と脚本作で評価され、ピンク映画の作家とも思われている。しかし若松孝二を支える脚本家（とくに足立正生）に対して大和屋の作品の様相が異なることはあまり詳説されていない。本発表では、大和屋の若松プロでの代表的な脚本作『処女ゲバゲバ』を分析することで、エロダクション運動における大和屋の特異性を解明する。

若松作品に特徴的な濡れ場の多義性は本作でより重層化した。濡れ場ごとに状況の変化が伴うほか、ヒロインの花子の裸体は十字架に置かれることで神聖化され、同時代の学生運動の状況を指し示す映画全体にも神話色をくわえる。さらに、呪術的なイメージをひきずりだす（松本俊夫の言）「オブジェ」は、それを初期の映画でマニエリスム的に羅列した足立正生に対し、大和屋では絶えず魔的な力が発揮される（足立は『処女ゲバゲバ』と同時期同ロケ地で、笑劇的な状況論映画『女学生ゲリラ』を撮っている）。大和屋が『処女ゲバゲバ』で用いたのは、たとえば学生運動の内ゲバで殺人武器として使用されたバット、非人間的な状態を指す尻尾、主人公を蘇らせるようなカメラなど。最後に、神聖性・呪術性の二点の前提となる「荒野」の魔界化問題がある。遠くに逃げた主人公・星が花子を銃撃した場所の迷宮性、星が探しても見つからないがボスの釣竿になお暗示される湖の不在などによって、この荒野は実際暴力を詰め込んだ若松作品の「密室」の裏返しとして、「地下室」を超え、人間を発狂させるような出口のない地獄となっている。星がボスを撲殺するという静止写真の連続で表現した最後の解決策は、暴力の輪廻を断

絶したと同時に、星の復活に説明と画面を欠落させることで見えないものとしての地獄の存在を引き立たせた。

それらに共通しているのは大和屋自身が松本俊夫のアヴァンギャルド理論の超越として志向した「インパーソナルなものへの対応」に働く彼のエロダクション運動理念と、非人間的な状況を描くことで悪夢感をもたらす彼独自の「恐怖映画」論であることを実証する。

宮澤賢治『春と修羅』『注文の多い料理店』論

—— 作中世界の構造を中心に ——

クジェル・イジー

本発表では、宮澤賢治の詩集『春と修羅』所収の詩二篇（「真空溶媒」と「小岩井農場」）と童話集『注文の多い料理店』の童話一篇（同名の「注文の多い料理店」）に焦点を当て、作中世界の構造の再検討を試みる。

賢治の詩と童話は、様式とターゲットの読者層を異にしながらも、両方のテキストを参照すると、テーマ的な共通点の存在を確認できる。その一つは、現実的な要素と幻想的な要素が併存し、相互的に物語を織り成す作品構造のパターンである。本発表の中では、そのパターンの顕著な一例になる詩と童話を取り上げ、現実と幻想を作品のテキストの中でそもそも区別できるか、作中主体がその間を行き来する過程がいかにかに描写されているか、そして現実と幻想を隔てるいかなる境界線が設けられ、いかにして越境されるか、という疑問をテキストの分析を以て明らかにする。そして、分析の結果として、上記の三つの作品のテキストにおいて表現されている世界の限界を特定し、賢治がその構築にあたり用いた手法を説明する。

さらに、本発表を通して、賢治研究の一つのキーワードになっている「心象スケッチ」の内実を再考察する。よく知られているように、賢治が詩集『春と修羅』について語る際に「詩」という言葉を使わないで、所収の作品を「心象スケッチ」と呼び、童話集『注文の多い料理店』の作品を自分の「心象の一部」としていた。そして、従来の賢治研究において、「心象スケッチ」は考察の基礎と、同時に一種の固定概念になっていると言えよう。ただし、詩人が自分の内面を詩のテキストにおいて描き出すのは、ごく当然のことであるため、「心象スケッチ」は、詩法として果たして特殊的であると言えるか。そして、その特徴は何であろうか。これらの疑問を、本発表の中で追究する。

太宰治「ろまん燈籠」におけるリライトの問題

田中 帆南

太宰作品にはすでに書かれたものを書き換え、新たな作品とするリライトが見られる。他者の日記や作品の改作、太宰自身の過去作品の書き換えがそれにあたる。本発表では、同様の登場人物が物語の創作を行う「愛と美について」と「ろまん燈籠」を取り上げる。

「愛と美について」は、1939年5月に河村書房から出版された短編集『愛と美について』のための書き下ろし作品として収録され、「ろまん燈籠」は1940年12月から翌年1941年6月まで『婦人画報』で連載された。「ろまん燈籠」に「愛と美について」の冒頭が引用されていることもあり、この二作品の連続性はすでに吉岡真緒や安藤宏によって言及されている。特に吉岡の論では「愛と美について」の結末における「退屈」が、「ろまん燈籠」で示唆される入江家の現在の暗さにリアリティを与え、後者の作品が戦時下のテキストとしてナショナリズムの核心を示していると結論づけた。これは同時代的な評価が中心となっていると言えよう。

舞台が入江家であること、兄妹たちが物語を連作していくという大枠、母に注目させるような結末がいずれにも共通して見られる。こうした類似点のほかに、相違点にも着目する。語り手の存在の明示や、兄妹たちの物語に介入する祖父母の有無、連作される物語が記述されるか否かがその例に挙げられる。以上の異同、そして作中で明示されるメタフィクション性を念頭に置き、兄妹たちによって連作される物語も含めて各作品の解釈を行う。これらの分析により、「ろまん燈籠」を「愛と美について」のリライトとして、具体的に位置づけることを本発表の目的とする。

村上春樹『アフターダーク』における記憶の回帰

沈 嘉琳

今までの『アフターダーク』（講談社、2004・9）に関する研究は主に、語り手、空間の多層性、監視社会、思春期における成長を中心に展開されてきた。その中で、エリとマリの繋がりへの考察はまだ十分ではない。

村上は「僕の気持ちとしては、エリとマリは裏と表なんです。マリが主体的にくぐり抜けようとしているものを、エリは受動的にくぐり抜けさせられている」（『恐怖をくぐり抜けなければ本当の成長はありません』——『アフターダーク』をめぐる——）、『夢を見るために毎朝僕は目覚めるのです』、

2010・9)と述べている。作品で、エリとマリの二本のストーリーラインを繋ぐのは、高橋とマリの対話と、白川の存在である。そのことを踏まえると、エリとマリが「くぐり抜けようとする」のは暴力性を帯びたトラウマの記憶である。

人間はトラウマを抑圧する傾向があるというフロイトの考え方に対して、ピエール・ジャネは、意識の中からトラウマを切り離そうとする「解離」の観点から論じた。乖離した体験は意識的には思い出すことができない。高橋の推測によると、エリは作中で完璧だと言われるものの、かつて暴力を受けたことがある。従って、エリがいる非現実の空間は、現実から乖離したトラウマの記憶が内在する空間だと考えられる。

白川に暴力を振るわれた女の子は、「昔の満州の方」出身の中国人である。そこから、本作品と日中戦争の歴史との関連性が読み取れる。マリは、戦争の歴史と関わりを持つ暴力事件に巻き込まれることによって、暴力に満ちた過去を持つことが暗示されている。「逃げきれない」「私たちは忘れない」などの電話からのメッセージが示唆するのは、被害者が被害体験を忘れないことである。それは、マリの協力による、エリの乖離した記憶の取り戻しと呼応し、作品のテーマとして理解できる。

本発表では記憶の視点から、『アフターダーク』におけるエリとマリの関係性について論じたい。

◆ 講演要旨

松本清張と東宝サラリーマン映画の邂逅

—— 「黒い画集」シリーズを中心に ——

志村三代子

松本清張原作の映画化作品は、現在まで計 36 作品が公開されているが、1957年の『顔』を皮切りに、名作と評価の高い『張り込み』(1958年)、『砂の器』(1974年)など、主に松竹で製作されてきた。本発表では、アダプテーションの観点から、サラリーマンが主人公である『黒い画集 あるサラリーマンの証言』(1960年、堀川弘通監督)、『黒い画集 ある遭難』(1961年、杉江敏男監督)、『黒い画集 寒流』(1961年、鈴木英夫監督)を取り上げる。これらのシリーズを、単なる人気作家による小説の翻案ではなく、東宝のプロ

グラム・ピクチャーのひとつであるサラリーマン映画の系譜に位置付けることによって、リアリズム路線を貫いた松竹とは異なる、松本清張映画化作品の新たな視点を提示する。

★講師紹介

志村 三代子 (SHIMURA Miyoko) 氏

◎現職

日本大学芸術学部映画学科 教授

◎研究分野

日本文学、芸術実践論

◎著書

『渋谷実 巨匠にして異端』（角尾宣信と共編、水声社、2020）

『川島雄三は二度生まれる』（川崎公平、北村匡平と共編、水声社、2018）

『映画人・菊池寛』（藤原書店、2013）

◎論文

「冷戦初期における米国国防総省の映画製作——『二世部隊』の製作協力をめぐって——」、『Intelligence』15号（2015）、38-48頁

「戦時下の〈女子〉「生産増強」映画——黒澤明の『一番美しく』（一九四三年）をめぐって——」、『二松学舎大学人文論叢』57号、89-107頁

「冷戦期ハリウッド映画における日本表象——『サヨナラ』（1957年）の生成過程をめぐって——」、『Intelligence』14号（2014）、138-148頁

ほか多数

◎所属機関プロフィールページ

<https://www.art.nihon-u.ac.jp/education/department/cinema/profile/>